

エウラシアの文化交流の歴史

その創造性と新たななる文明の摸索

地中海世界と東方大陸のメソポタミア文明、イラン文明、インド文明、中国文明と極東アジアを繋ぎ文化の交流を促進した道は複数であり、多様であった。エラトステネスやプトレマイオスの世界図は、まだ互いに脈絡のないばらばらな情報をかき集め、任意にモザイクのように繋ぎ合わせたものにすぎない。しかしそれにかかわらず異質な世界を繋ぎ止め、互いに交叉させる夢を図らずも内含する試みでもあったようにもみえる。

エウラシアは壮大な複合・多元的な文化交流を通して形成されてきた歴史空間である。それはまた、異なる文化が交差し、融合し、変容し、新たな文化を絶えず産み出してきた創造的な空間でもあった。こんにちエウラシアはグローバル化の浸透に揺動しながら、さらには「一带一路」というまず中心に吸収しつつで分節包括する政治路線の風圧に



前田耕作（まえだ・こうさく）

1933（昭和8）年生まれ、名古屋大学文学部卒業。1976年より和光大学教授（アジア文化・思想史）、アフガニスタン文化研究所所長、2017年より東京藝術大学客員教授。64年第一次名古屋大学アフガニスタン学術調査団に参加しバーミヤン仏教遺跡の調査に従事。89～90年以來クエタ、マストゥング、カラートの遺蹟を実地調査。2003年よりユネスコ日本信託基金に基づくバーミヤン遺蹟の保存・修復事業に従事。著書に『アジアの原像』（NHKブックス）、『宗祖ソロアスター』（ちくま学芸文庫）、『玄奘三蔵、シルクロードを行く』（岩波新書）、監修に『ローマ宗教文化事典』（原書房）など多数

Kohsaku MAEDA
前田耕作

よろめきつつも、いまなお多元的で双方向的な国際的・文化の連携による新たな文明の形成を模索し始めている。

そもそもヨーロッパとアジアの間の空間と時間を背負って織り成された多文化を紡ぎ合わせる《エウラシア》というイメージ空間はどのように形成されてきたのであろうか。

ヘロドトスは地中海とその沿岸世界とアジアにおけるそれぞれの営みを決して切り離すことなく《歴史》(ヒストリエ)として綴り合せた最初の人であった。そして人びとの移動をヘロドトスはギリシア人がエジプトへ赴く動機に触れて語っている。「キユロスの子カンピュセスがエジプトを攻めた頃、ギリシア人も多数エジプトへいつていたが、多くは商用で赴く者もいれば、遠征に従軍した者もあり、また単にこの国の見物に出かけた者もいた」(『歴史』Ⅲ・139)。つまり「取引、戦争、そして見る欲望」が世界を動かしているというのである。「見る欲望」は「知る欲望」であり、それは「もっと広く知りたい」、「もっと深く知りたい」、つまり「哲学する欲望」でもあるとはピュタゴラスの言である(『フランソワ・アルトック』オデュッセウスの記憶)。

小アジアのカリアで生まれたヘロドトスが書き残した『歴史』の素晴らしきは、ギリシアの歴史にとどまらず「バルバロイ」(異邦人)の果たした驚嘆すべき事績の数々を、「みずから調査・研究して書き述べた」ところにあるだろう。

彼は多くのバルバロイの地に旅することによって、異文化世界の多様さに接し、バルバロイという概念を自在に変形し豊かにしている。その一つの典型的な例がスキュタイ人である。アクセイノス、ギリシア人が呼び慣わした黒海の呼称だが、暗い、くすんだ、を意味するペルシア語に由来するという。余所者を歓迎しないという意味でもあり、それゆえアクセノス、歓迎されない海とも呼ばれるようになったという。しかしスキュタイとの交易に利を感じとったイオニア人たちは次第に接点を拡大して黒海の北岸につきつぎと植民市を築いていった。テュラス河口のニコニウム、ポリュステネス河口のオルビア、カルキネ、ケルソネソス、タウリカ(現在のクリミア半島)南端のケルソネソス(ヘラクレア)、東岸のテオドシア、メオティス・パルス(アゾフ海)入口のパンテイカバエウム、アゾフ海の最奥部、ドン河口のタナイス、それぞれがスキュタイとの接点であった。この地域の現代にまで伝わる考古遺跡についてはすでにミハエル・ロストフツェフがその著『古代の南露西亞』(1921年)で詳細にふれている。

スキュタイの東方にサルマタイ、そのまた東辺にカスピ海があった。ヘロドトスが『歴史』の第4巻の冒頭で語る「アジアの遊牧民」スキュタイ人の逸話は、おそらくオルビアを拠点にして聞き書きしたものである。ヘロドトスがペルシア帝国の周辺にいるつねに動的な遊牧民が世界史を

構成する不可欠な部分であることを直感できたのは、ほかならぬヘロドトス自身が、アジアのカリアと海を渡ったイオニアの混血で、どこかに定着民とは異なる「境界を浮遊する」知性に突き動かされていたからであろう。

このスキュタイは同じ遊牧民サルマタイを通してカスピ海東岸の雄族マツサゲタイと繋ぎ留められる。マツサゲタイ族は「農耕はまったくせず、家畜と川から採れる魚を食料として生活しており、飲料にはもっぱら乳を用いる。神として崇拜するのは太陽だけで、馬を犠牲に供える。神々の中でもっとも足の速い神には、生きとし生

きるものの中でもっとも足の早いものを供える」というのである(『歴史』第1巻・215)。やがてペルシアと戦矛を交えることになるこのマツサゲタイ族の故地を、ヘロドトスは「コーカサスの東方に広漠として視界も及ばぬ大平原が広がり、その大平原の少なからぬ大部分を占めている」と記している。後年エウラシアと呼ばれる地域である。ヘロドトスは、このつねに揺動する空間を駆け抜ける民族の気配にまなざしに留めながらギリシアとペルシアの世界史的対立を描くことで、多色で織りなす(ポイキリア)歴史の在り方を示したのである。

ヘロドトスが西方、南イタリアのトゥリオイに赴いて、なにひとつの記録も残さずその地に歿してから、ほぼ200年後、東方アジアに向けて兵を挙げたマケドニアの王アレクサンドロスは、ヘレスポントス(ボスポラス)の海峡を渡ってアジアへと進軍し、小アジアの古都、「ギリシア神話の最後の火花を保存していた舞台」(ギボン)イリオン(トロイア)でアキレウスの面影を偲んだあと、小アジアを抜けエジプトへ、そして反転しバラボタミアからバビュロニア、カルディアの地に至る。ペルシア帝国の首都スーサを落とし、ペルセポリスを炎で包み、カスピ海の東南端をかすめ、



パルティア東方のアレイア、現在のアフガニスタンのヘラートに赴く。バクトリアを目ざす進軍であったが、アレクサンドロスが辿った道は、南下してドラングアナのフラダを経て、エリュマンドロス（ヘルマンド）川を遡行してアラコシア（現在のカンダハル）へと至る道であった。エリュマンドロスとはアヴェスタ語ハエトウマントのギリシア語による音写であろう。アレクサンドロスは、ヘロドトスがキュロスゆかりの地としたアラコシアの古都を新たな都市アレクサンドリア・アラコシアと改名し、マケドニアの将メノンに駐留軍を託して、さらに北方へと進軍する。後年、このアレクサンドリアは、セレウコス1世とマウリヤ朝の祖チャンドラ・グプタ（月護王）との協約（前305年）によって割譲されることになるが、セレウコスの部将シイピッテイスの部下メガステネス（前350〜290）は両世界を結ぶ使節としてここからマウリヤ朝の都市との間を往来したという。前302年から前290年の間のことであった。その重要都市の一つがギリシア語でパリボトラと呼ばれたパータリプトラであった。かつてのマガダ国の王都であり、7世紀に玄奘が訪れた華氏城、波吒釐子城がこれにあたる。メガステネスが現地で見聞し、書き残した未知の東方世界の地理と民族誌的な報告『インド誌』

残した未知の東方世界の地理と民族誌的な報告『インド誌』



（3巻か4巻あったという）は、早くに散失してしまったが、フラウイウス・アッリアノス（『インド誌』やディオドロス・シクルス（『歴史叢書』）、ストラボン（『地理誌』）、大プリニウス（『博物誌』）に引用・活用されて生き残ることとなった。地中海世界から東方アジア、ガンジス河辺への長い視線の持続と変異を読みとることができる。後年プロトレマイオス（後2世紀）が「ガンゲス河から内側のインド」と呼んだ地域にまでヘレニズムのまなざしは届いたのである。

チャンドラ・グプタの孫、ビンドゥサーラ王の子アシヨカ

王の治世になると、西から東への視線は逆転する。マウリヤ朝は西南のブローチ(古名バルカツチャ、ギリシア名バリユガサ)の港をエリユートラ海(インド洋を含む紅海までの海洋)に向かつて開き、東西交易は海陸を利用して双方方向でおこなわれるようになってゆくのである。アレクサンドリア・アラコシアでは、マウリヤ朝極西の地として記念碑的な大きな岩に「アシヨカ王の法勅碑文」が刻まれることとなる。碑文はギリシア語とアラム語の二カ国語で刻まれた。言語は当地がなおペルシア系の人びととギリシア系の人びとによって主導されていたことを裏付けているが、アシヨカ王は別の碑文の中にシリアのアンティオコス2世テオス、エジプトのプトレマイオス2世フィラデルボス、マケドニアのアンティゴノス2世ゴナタス、リュビアのキュレネ王マガス、エペイロスのアレクサンドロス2世の名を列挙し、彼らのもとに使節を派遣したと記させている。東方世界から地中海世界へ向けての最初の発信であった。ギリシア(ヨーナ)人ダンマラツキタが仏教の伝道使として西方の辺境地域へと派遣されたのもこの時期であった。こうした時流と交錯し、アレクサンドロスが中央アジアにもたらしたヘレニズムの潮流にも大きな変異が生じ始める。

オクソス河畔のバクトリアでのギリシア人の反乱にふれる前に、いま一度ヒンドウクシュの南麓に達した進軍途中のアレクサンドロスの動静に立ち戻ろう。ヘロドトスが

ダレイオスによって制定されたとする「二十の行政区」のうち第十五区に所属したという地域に、アレクサンドロスは新たな軍制を敷き、北上し「アジアのどんな山よりも高い」というカウカソス(現在のヒンドウクシュに与えた呼称)山の麓に至った。すでにペルシア帝国の東辺で、ここから以東のことに関するヘロドトスの記述は、ことごとく伝聞によっている。アレクサンドロスはインドに赴く前に、盟主ダレイオス(3世)を殺害し、自らキダリス冠を戴き、アルタクセルクセスを僭称したバクトリアの領主ベツソスを捕らえねばならなかった。アレクサンドロスは、北方に立ち足かかると「山の尾根が裸」(クルティウス・ルプス)のカウカソスの麓、バンジシル川とコベン(カーブル)川とが合流する要地に攻守の拠点を設営し、まず山越えの進軍を図った。「パラパニサダイ人」の地とされる地勢険しいこの地こそ、のちクシャーナ朝の夏の都カーピシーと呼ばれる所にほかならない。プトレマイオスの地図にみえるカピサ、プリニウスの『博物誌』にいうカピツサ、玄奘が訪れた迦畢試、現名ベグラムがここである。玄奘によれば大乘の寺もあれば、小乗の寺もあり、仏教以外の教えを信ずる者もいたという。エウラシアで交錯する複数の文化が混在していたのであろう。1920年代にフランス隊によって発掘され、世界を驚かせたベグラムの文化の多層性についてはのちに改めて考察することにしよう。

ついに大山脈を踏破したアレクサンドロスの軍はバクトリアの都バクトラ（現在のバルフ）に達したが、ベッソスを捕獲することはできず、改めてここに軍営をさだめ、コラスミア人（アラル海の南東に住む遊牧民）、ダハエ人（カスピ海東岸に住む遊牧民）、サカイ人（バクトリアとソグディアナに住む遊牧民）、ヤクサルテス（現在のシル・ダリヤ）河の向こうに住むスキュティア人の参加を待ったとクルティウス・ルフスは『アレクサンドロス大王伝』に記している。アレクサンドロスは、オクソスを渉り未知の地ソグディアナに軍を進めるには、周辺の遊牧の民の協力が不可欠と考えたからであろう。ペルシア帝国の名だたる碑文にバクトリアとともにかならずその名が刻まれたソグディアナ、「加工したラピスラズリとカーネリアン」をダレイオスのスーサの都に届けたソグディアナへの進軍は、ヘロドトスがペルシア帝国の東北端、第十六区に位置つけた地域へのギリシア軍の初めての侵攻でもあった。ソグド人からすれば、エーゲ海の彼方からの異文化の到来でもあった。「エーゲ」とは「山羊」が原義という。



東方の眠れる羊ソグディアナは西方の山羊の思いも掛けない襲来によつて初めて揺さぶり起こされ、みずからの行くべき道を摸索し始めるのである。その向かう視線は、すでになきアケメネス帝国ではなく、さらに遙か西方、ローマの台頭によつて多重化しつつあつたヘレニズム世界と東方、ようやく歴史の胎動を見せはじめた草原と砂漠の彼方であつた。

豊かなオアシス農業地帯を有するソグディアナの第一の首邑、「王宮のあるマラカンダ」(現在のサマルカンドに隣接するアフラシアブ)へのアレクサンドロスの進軍は、地勢を知り尽くしたソグド人の執拗な抵抗によつて難渡するが、ようやくにして落とし、さらにヤクサルテス(現在のシル・ダリア)河畔にまでつづく。そこには高い囲壁で囲まれた「キュロスの町」(キュロポリス)、ペルシア帝国の最果ての都城があつた。アッリアノスはこの都城を護る「土着の民」の宗教にまでふれていないが、おそらくキュロスの信仰を受け継ぐものであつたにちがいない。キュロスがもともとメディアの王子であつたことを考えれば、ヘロドトスがふれているように、「メディアの6部族の一つ」(『歴史』I・101)で世襲の神官であつた「マゴス」が伴い來たつたにちがいない。彼らは「夢占いに従事」(I・107)し、「供儀の酒を注ぎ」(VII・43)、「白馬を供儀」(VII・113)し、「大声で風に呪文をかけ」(VII・191)、また「祈祷の呪文を唱える」(I・132)

ことを職能とした。「神への供儀はこのマゴスなしではせぬ慣わしであつた」(I・132)という。ソグドのキュロポリスにおいてもこの慣習は守られたと思われる。クセノポンが『キュロスの教育』の中に残した記録はさらに興味深い。キュロスがリュディアの王都を落としたとき、王宮の中に入ったキュロスが最初になしたことは、「まずヘステティアに、次に神々の王ゼウスとほかにマゴスたちの指示する神に犠牲を捧げた」(VII・5)と。ヘステティアは炉の女神であり火を意味しており、神々の王ゼウスがアフラ・マズダーを指していることは明らかである。いずれも天空の神だからである。さらにマゴスたちの指示により「ヘリオスに犠牲を捧げた」(VIII・24)とも記されている。ここでいうヘリオスはミスラのことであろう。後年ローマ皇帝の心を深く捉えたこの二柱の太陽神については改めて論ずることにしよう。ともあれソグディアナの地がキュロスの信仰に染め上げられたのはいうまでもない。

キュロスが拜火の儀礼をソグディアナにもたらしたことも疑う余地はないが、ゾロアスター教を流布させたわけではない。ゾロアスター(ザラスシュトラ)の生誕が前630年で、没年が前553年(伊藤義教説)であるとすれば、キュロス(在位：前558年～前530)は充分にその教説を知り得たといえる。メディア人の母とペルシア人の父との間に生まれたキュロスは、覇権を握つたのもこの生來の

両価性(アンビヴァレンツ)を母斑として受け止め続けたの
であろうか、異宗教に対してきわめて寛容であったように
思われる。キュロスがペルシア帝国最果ての地ソグディアナ
の天空に向かって燃えたたせた火はなにを照らし出したの
であろうか。

(つづく)

バーミヤン仏教遺跡を訪ねてきて、質問するバーミヤン大学の男女の学生。
女子学生が異教の遺跡に関心を持ち、現場にやってくるなどこれまで考えられなかった。2003年から
始まった日本隊による壁画保存作業の主要な部分は女性の専門家によって行われてきたことと、作業後に
バーミヤン大学の学生たちに作業の概要を伝える講座を開設してきたことなども彼らを異教の石窟へと足を
運ばせる動機となったのであろうか。